

おお大勝利

平成 26 年度山東サッカー一部報第 10 号 (6 月 17 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

県総体後のリーグ戦初戦を勝利で飾る

6 月 14 日 (土) Y2B の聖地山形明正 G で第 5 節が行われました。予報では県全体であり良い天候ではなく、村山地区は午後から雨模様の予報。しかし、人工芝ピッチは「なんのその」でしょうから、山形明正さんへの感謝の気持ちでピッチに向かいました。午前中は肌寒くもありましたが、昼くらいから風も収まり日差しも強く、逆に汗ばむほど。もう一つの会場である鶴岡南 G では、折からの降雨により厳しいコンディションだったようですので、それを聞くにつけても明正さんへの感謝の念が沸き起こる。

山東は 5 月 30 日に県総体で鶴南に無念の一回戦負けを喫し、失意の中でしたが、翌週 6 月 2 日 (月) から部活動を再開しました。**県総体への思いが強かった分、3 年生は気持ちの切り替えが難しかったと思いますが、13 人中 9 人の 3 年生がリーグ戦前期優勝の目標のため部活動を続けることとなりました。**6 月 9 日からは前期中間考査のためのテスト休み (部活動停止) に入るため活動はしませんでした。6 月 14 日はその 3 年生の気持ちがあふれる戦い、またはその 3 年生の気持ちに応える戦いをしたいところ。

事情により県総体一回戦を観戦できなかった清野 OB 会会長と後藤報道局長がそろっていらっしゃる。会長は、「(県総体行けなくて) 悪かったな」と顧問に声をかけるも、私の口から出る言葉は、「いやいや、(一回戦も突破できなくて) こちらこそすみませんでした」。保護者の方はいつもの通り大勢いらっしゃっている。**良い時も悪い時も支えて下さるありがたみを、負けた時こそ感じる。**そして今回は校長先生について触れなければならない。6 月 13 日未明に顧問今野が突然の右足首の激痛に見舞われ、翌日のベンチ入りが危ぶまれたものですから、佐竹校長が「(今野がいないのであれば) ベンチで志村先生のお手伝いくらいならするよ」と言って下さる。13 日 (金) は松葉杖でしか動けませんでした。治療の甲斐あって 14 日 (土) にはビッコ引いて何とか歩けるようになったので、明正 G の長い階段に恐る恐るしつつも今野ベンチ入り。しかし、そこで教子でもある今野はふと考えました。「**H4 年に山東を IH に導いた翌年に県庁にご栄転され、道半ばで『監督業』から退かれた校長は、ベンチ入りしスタッフとして戦いたいという気持ちを抱き続けていたのではないか。**であれば、これを機にお願いしようか」。ということで、校長先生に (今野ベンチ入りしますが) 是非ベンチ入りしてくださいと強くお願いし、**佐竹先生戦いの現場に再降臨。**ということで、ベンチに清野 OB 会長、佐竹校長が鎮座する重厚な布陣で米工戦スタート。

試合開始直後は山東の緩い入りを感じさせるも、徐々に山東ペースか。この試合、県総体の反省と GK ケツツンの足首捻挫を踏まえ、低い位置 (自陣ゴールに近い位置) から丁寧にパスをつ

15 年ぶりにセレブしか雇わないと言われるあの病に罹ってしまいました。前回は左足の親指の付け根でしたが、今回は右足首。前回とは比べ物にならないほどの激痛でしたし、どう足をかばっても動くとも痛い。風が吹いても痛いと思いますが、風が吹かなくても痛かったです。最近、全然身に覚えのない足首の痛みを感じていましたが、こういうことだったのですね。

ないでいく作戦。米工が前から「はめて」こない²ため、CDF アカガワサン、タツル、そして、ボランチのカツミらが GK と連携して、低い位置でのサイドチェンジを繰り返す。ただ、そこからのビルドアップには安定感はなく、米工のディフェンスの網にかかることが多い。それもそのはずです。こういう長いボールに頼らない戦いをこれまで辛抱強くしてきてないわけですから³、それも致し方ない。ただ、こういう戦いもトライする価値はある。**長いボールを入れて競り合っ、というの必要ですが、それしかできないのはダメ**。でもですね～、つないだ挙句蹴られたロングボール⁴の精度が低い。これは問題。そんな、つなぐけど最後まで行けない試合展開の中、主将コウタが光る働きをしました。シンスプリントという脛の故障のため県総体も満足に走れなかった **FW コウタが、左から右へと斜めにドリブル開始。そして何人が交わしてゴール左隅に右足でシュート、そしてゴール!** 山本学園戦では決まらなかった形を引退前に成功させてくれました。コウタはまだ本調子ではないものの、今後に期待させる活躍を見せてくれました。前半 1 対 0。

前半はやや風上にあり、追加点が欲しかったのですが、何となく一点リードのまま試合が流れたとの印象あり。ハーフタイムには「後半頭から追加点を奪いに行かないと、フワツとしたまま試合が流れ、相手に隙を突かれ同点・逆転させられるぞ」と声をかける。ただ、近くで恩師が見ているだけに、そう話す顧問もやや緊張気味。

さて後半。まず足をつる選手が続出。やはりテスト休みの影響でしょうか。それとも山東の選手の体力がただ足りないのでしょうか。ともかく、米工の選手にふくらはぎの筋肉を伸ばしてもらうこと度々（米工の皆さんありがとうございました）。後半も同じように「下から作る」戦いをするも、米工の CDF が良く、つぶされ、内容は一進一退。そんな中、**ムンタリ得意の《ロングボールかっさらい》から彼が追加点を決める**。前半決定機を外し、ハーフタイム悔しそうにしていたムンタリがやはりチームを救う。最後は、タツルのドリブルでの攻め上がりから出されたナイスパスが発展し、最終的に右センターリングから **FW タイチのソフトタッチボレーが決まり、3 対 0。タイチのシュートも良かったですが、この日はタツルが攻守にわたり大車輪の活躍!** 深く攻め込まれましたが、米工に決定的な形は作らせず。結局 3 対 0 で勝利。内容はともかく、県総体敗退後のリーグ戦をしっかりと勝ち切れたこと、応援に回ったリンちゃんやエイジ含め 3 年生の存在の大きさを改めて感じる事ができたことがとてもうれしかった。

応援ありがとうございました。次戦遠方ですが、応援よろしくお願いします!

6 月 28 日 (土) Y2B 第 6 節 鶴岡南戦 12:00~ @酒田市飯森山 G

² 「はめる」とは、ボール近くの相手選手全員にマークに行き、フリーの選手を作らず、前からボールを奪っていくことを意味します。

³ こういう言い方をすると、《ショートパスでつなぐサッカー (パスサッカー)》を本来すべきではあるがこれまでできなかった、という意味に解する方がいらっしやるかと思います。近年、スペインやバルサの《パスサッカー》へ異常な憧れを示す日本人が多く、特に、ジュニアやジュニアユース年代の指導者でそういう方が多いように思われます。ロングキックが蹴れないジュニア世代では、《蹴るサッカー》=《でたらめなサッカー》となってしまうでしょうから、《蹴るサッカー》≠《つなぐサッカー》という理解は致し方ありません。しかし、そうした理解の弊害として、ユース世代では、①ヘディングができない (浮き球のボールを奪い合う争いができない)、② (ロング) キックができない、そして遠くに蹴ることができないため当然に、③ (遠くまでの) 広い視野を持ってない高校生が増えているように感じます。他県の選手のように、しっかりと細かな技術が身につけばあとは高校でそうした「弊害」の矯正を行うだけでしょうが、**山形では、(パスサッカーのベースになる技術がものすごく疎かなくせに)「蹴ること」へのアレルギーだけは他県並みに共有されている**ように思います。ユース世代では、《蹴ること》と《つなぐこと》をイコールにする取り組みが必要です。これは何も《でたらめなサッカー》を推奨しているわけではありません。ともかくも、①~③のような課題があり続けられれば、山形から良いボランチや CDF が育つことはないでしょう。

⁴ 最後まで短くつなぐことは重んじていません。機を観て相手 DF ラインの裏を攻略するのは、とても大切な攻め口と考えています。ただそれも、つながらなければ意味がないわけで、ロングキックで攻める攻撃を成立させるためには、キックの精度は重要です。